

うとしたが時既に遅く、釣り手を切落されて進退思ふに委せず乱刀の下に無念の最後を遂げたのであった。これからは些〔ち〕と歌舞伎劇の領分に入る物語りとなる。この惨劇と時刻を同じくして、仙台城では、夜中忽然と山家清兵衛が登城して「火急の儀につき屋形様に直々御目通り願ひ度く、夜中恐入り奉るが何卒御取次ぎ願ひ度い」と云ふので、当番の近習が主君に註〔注〕進する。忠宗公は審〔いぶか〕り乍ら引見すると、平伏してゐる公頼の姿は見るも無残な血塗〔まみ〕れであった。』〔以下は、「仙台近古史談」や「仙台人名大辞書」の山家公頼の記事と同様のストーリーなので省略〕

資料 台徳院殿御実紀巻52

貞山公治家記録巻之28

北宇和郡誌（改題：宇和島吉田両藩誌。愛媛県教育協会北宇和部会）

宇和島の自然と文化（宇和島文化協会）

うわじま物語（谷 有ニ）

88. 原田甲斐は政宗の孫かどうか

問 原田甲斐は、政宗の孫とかわれませんが、本当でしょうか。

答 伊達政宗(1)と「香の前〔においのまえ〕」との間に、後年原田甲斐(2)の母となった慶月院(3)と、亘理宗根〔むねもと〕とが生まれています。これら政宗の実子は、香の前は豊臣秀吉が茂庭綱元(4)に与えた女性であるという事情から、二人とも茂庭綱元の子として育てられます。その中の姉の方が、原田家18代宗資の妻となり、甲斐宗輔を生んだのであります。故に、原田甲斐は、まぎれもなく政宗の血統を引いた孫ということになるのです。

この事実は、君公の事歴としては極めて機微にわたることですので、正史には載らず、次の諸書によって知ることができるものなのであります。

1. 「伊達世臣家譜」巻之4

『茂庭〔一族〕

文禄元年〔1592〕朝鮮之役、公発岩出山到京師、綱元従之、秀吉見綱元、問所以称鬼庭、对以実、是時奉秀吉之命復本氏〔茂庭〕云、綱元此時不従朝鮮之役、奉公命為留守于肥前名護屋、屢謁見秀吉、此時秀吉賜居宅於伏見、秀吉有愛妾十六人、以其一人高田次郎 右衛門女賜綱元、後生亘理伯耆宗根者是也〔女子は記さず〕、〔中略〕宗根則秀吉所賜之妾所生也、出而統亘理家、其妾以宗根之因母〔実母〕、晚養于亘理家、〔下略〕』。

2. 「伊達世臣家譜」卷之2に、

『巨理（一家）』

巨理姓平、……以巨理美濃守初称源五郎 重宗為祖、重宗慶長九年貞山公時、告老之後、是年十月賜養老資千石五升于栗原郡高清水邑、以其祿別立家、十一年養茂庭石見綱元第四男配女為老後嗣、稱之伯耆守初称又次郎又右近 宗根、年甫八歲、始奉謁于貞山公、此時公賜小刀一口、年十三歲加元服、又奉謁于公、賜諱字〔宗〕、……綱元有妾高田次郎左衛門某女、文祿三年閏白秀吉公、賜綱元為妾、 為宗根之因母、綱元以 田百石与其妾、妾老後就宗根養、〔下略〕』とある。

3. 「仙台あちらこちら」（佐々 久）に、

『茂庭綱元は政宗の家臣として片倉小十郎と共に天下に知られた傑物であった。秀吉にも愛され遂に秀吉は文祿三年愛妾の一人高田種子を彼に与えた。これを見て屋代勘解由は政宗に「彼は秀吉の旗本になりたいらしい」とつげた。政宗はかんかんに怒って小十郎に綱元をよべと命じた。岩出山時代のことである。小十郎は綱元の所にゆき事情を話し、「政宗は君を斬りかねぬぞ注意せよ、自分も共にゆく」とつれ立って出かけたが、綱元は二人の腹心を左右につれてでた。綱元は政宗よりも十八も年上であり、小十郎は六ツ年上であった。小十郎と綱元が共に部屋に入ると、腹をたてていた政宗は「綱元は隠居せよ。家は息子につがせる」とどなり奥に入ってしまった。片倉は「君はもしもの時は自害するつもりで家来をつれてきたな」と話したという。政宗は綱元の子良元に綱元には百石だけ渡せ、それ以上渡してはならぬと厳命した。綱元は食うを得ず、伏見の妾種子の所にわずかの家臣をつれて亡命した。江戸を通るとき綱元は家康に挨拶をした。家康は俺につかえぬかとさそった。綱元は辞退した。家康は鞍をおいた馬と槍を与え、さらに金を与え、さらに交通手形を与えて、「何なり物資を仕入れてゆかれよ」といたわった。この槍は今も松山茂庭の家に伝わっている。閏白秀次の出家自殺に関し、政宗も綱元の後から伏見に赴いた。伏見について間もなく政宗も秀次と通ぜる疑をかけられ門を閉じて引籠った。近所の町人共は政宗が家来共を屋敷に引き入れ京中を焼き払い切死するならんと噂して騒動した。綱元は勘当の身であったが政宗屋敷に入り次の間に静かにつめていた。家康の茶の宗匠小林宗薫はこれを見て政宗にとりなし勘当はとけた。事件のすんだ後、綱元は別殿に種子をおき政宗に奉仕させた。かくて種子は相ついで女子と男子を産んだ。種子は「香の前」であり、生まれた女子は後に原田甲斐の母となり男子は佐沼巨理氏の先祖である。共に綱元の子として育てられた。〔下略〕』とある。

4. 「高清水町史」（高清水町）に、

『香の前は京都伏見の浪人高田次郎右衛門の娘で、一八歳で豊臣秀吉に召し出され姿容優美静寂。秀吉一六愛姫の一人と伝えられる。

政宗には天下に名を知られた家来が二人あった。一人は片倉小十郎、他は茂庭綱元である。政宗は一般に家臣には高祿を与えなかった。この二人の名臣に対しても5,000石前後の祿を給したのみであった。秀吉は天下をとったが家臣の最高は浅野、石田であり側近の家臣として片桐勝×〔且〕元等

であった。したがってよい家臣を得んとして茂庭、片倉が薄禄なのを見て我に属さぬかと働きかけたふしがある。器量人と見たからであろうし、また政宗の身邊の両雄に目をかけたとも見られる。政宗はよく一族とも意見の相違を来し、叔父国分盛重はのがれ去り父の従兄弟伊達成実(5)も一時政宗のもとを去って高野に入った。また母は最上に走り、弟小次郎を殺すはめとなるなど親近すら叛く有様であった。戦国武士の境遇といえればそれまでだが、若い政宗はまだ至らぬものがあつたといえる。秀吉が茂庭、片倉をしばしば接見したのもこんな所に原因があつたであろうが、片倉小十郎は秀吉の誘いにのらなかつたらしい。茂庭綱元は少しは心動いたものがあつたであろうか、碁に勝つたので愛姫の一人「香の前」を文禄三年（一五九四）賜つたと伝えられる。秀吉の誘いにのりかけたとも見られる。政宗は怒つて綱元に隠居を命じ一五〇石〔100石〕で生活せよと言ひ渡した。香の前は伏見にいた。一五〇石〔100石〕の隠居が妾を擁することは困難であつただろう。綱元は国をでて江戸に至り、家康にいとまをつげた。家康は自分につかえぬかとさそつたという。固辞すると馬具をつけた馬と槍と金をくれ、何なり関東から買ってゆき京都でさばけと教え、さらに東街〔海〕道通行の手形をもくれたという。綱元は伏見についたが、政宗が伏見につくと秀吉から「綱元を遊びによこせ」といわれた。政宗は綱元のために熊の皮一〇枚を与え、秀吉へのみやげとさせた。綱元は政宗のしうちについては一切秀吉に告げなかつたらしい。綱元は政宗を家に招き別棟においた香の前をすすめた。以来政宗は綱元の邸をしばしば訪れた。かくして香の前は二人の子を設けた。一人は原田甲斐の母であり、一人は巨理宗根である。しかし政宗ははばかりの所があつたと見えてこの二人を茂庭綱元の子として育てさせた。関ヶ原の役（一六〇五。××〔1600の誤り〕）の後仙台に築いた政宗は、大崎八幡(6)を城の天門〔乾。戌（いぬ）と亥（い）の中間の方角。北西〕の方角に当る西北に造宮した。京都の豊国神社の建築様式をまねたものと考えられる。神殿落成のとき政宗は香の前に「おまえは大閤の恩義もあることだから燈籠をおさめたらよからう」と金属製の燈籠を奉納させたという。大崎八幡は八幡社と共に豊国廟をもかねたものであつたろう。しかし江戸時代に忘れられた。』

5. 「伊達騒動と原田甲斐」（小林清治）

『幼くして父を失つたとはいえ、宿老上席の家がらと、茂庭・津田両家との姻戚関係、さらに香ノ前の子巨理宗根……政宗の遺子宗根を叔父にもつ甲斐は、二代忠宗に寵愛されたものと思われる。……甲斐の母は秀吉の側室香ノ前の娘である。』

6. 「宮城県女性史」（中山栄子。「宮城県史」29の内）

『香の前』

香の前は京都伏見の浪士高田次郎右衛門の女で種といい、京美人の代表とも言われるほどの美女であつた。一八歳の時豊臣秀吉に召し出され、香姫と呼ばれた。美貌の上に立居振舞もしとやかで豊公十六愛姫の一人であつた。文禄四年（一五九五）政宗が秀吉に拝謁した時、秀吉から賭け碁の相手××××を命ぜられ、代りに松山邑主〔西磐井郡赤萩、知行500貫。松山に移るのは、その子15代良元、

慶長8年(1603)茂庭綱元に相手を願った。綱元は秀吉から特に愛され、器量を認められており、邸宅を京都に賜わろうとさえしたほどであった。綱元が負ければ首を上げるという一命を賭けての勝負で、秀吉が負けた場合は、侍女一人を贈るという約束であった。綱元は戦場にのぞむ思いで盤に向ったが、再度勝利を得ることが出来た。秀吉は仕方なく約束に従って侍女を集め、綱元に選ばせることになった。盛装の美姫が十数名も居ならんでいる中から、折柄部屋の掃除にあたっていた質素な身なりの侍女を所望した。奥州の仙台藩は貧しくて、到底贅沢をさせておくわけにはいかないから、この女ならいたがきたいとって貰い受けたのが、実は秀吉第一の寵姫香姫であった。綱元の眼識にさすがの秀吉も驚いたが、約束は果さねばならず、姫は綱元に従って仙台に連れて来られた。〔?〕綱元は仙台片平丁の藩公の別荘〔?〕に住居させ、政宗の侍女とした。香の前は女子・男子を生んだ。女は原田甲斐の母、男は佐沼邑主巨理氏の祖である。……巨理家には、政宗が香の前に与えた寛永二年〔1625〕十月一日付の書簡が今も保存されてある。〔下略〕』

7. 「仙台人名大辞書」(菊田定郷)

『ニオイノマエ(香の前)

関白秀吉の寵妾。後ち阿種の方と云ふ。京都伏見の浪士高田次郎右衛門の女、年十八太閤秀吉に召出され、香姫と称す。通名は種と云ひ、容姿艶美、国色人を動かす、座作静淑、豊公十六愛姫の一人なり、文禄四年豊公伊達家の長老茂庭石見綱元の器才を愛し、邸宅を伏見に賜はらんとせしも綱元固辞して受けず、一日太閤賭して綱元と囲碁す、綱元克ちて香の前を獲たり、綱元別館を設けて之に居らしむ、政宗公の寵する所となりて一子を生む〔女子の出生を書かぬ〕、然れども故ありて綱元の四男として之を養育す、〔上略〕』

8. 「松山町史」(松山町)

『茂庭』一四代(近世代)綱元 延元 左衛門 石見 了庵高味〔こううん〕

文禄元年(一五九二)秀吉の朝鮮征伐に際し政宗の軍に加わって肥前名護屋(佐賀県東松浦郡鎮西町)留守居をつとめ、その間、秀吉の命により鬼庭を茂庭に改めた。文禄三年秀吉から伏見に五町四方の屋敷を賜ったが固辞し、香の前を賜わる。香ノ前は名は種、一八才で伏見の侍高田次郎右衛門の娘、後に慶月院(原田甲斐宗輔の母)と伯耆宗根(高清水、後に佐沼巨理巨理氏)を生んだ。〔下略〕』

9. 「栗原の遍歴」(白鳥白陽)

『福現寺〔高清水町〕

台地の南、福現寺の境内に荒れ果てた香の前の墓所がある。香の前は文禄三年(一五九四)太閤秀吉から茂庭綱元に与えられた女性である。綱元は香の前を伊達政宗のもとに侍らしめた。香の前は京都伏見の高田次郎右衛門の娘で名前をお種といい、当時十八歳であった。慶長五年(一六〇〇)香の前は男子を生んだ。政宗はこの子を茂庭綱元の四男とし、名を又次郎と名付け、慶長十一年涌谷城の巨理美濃守重宗(伊達安芸の祖父)が隠居する時、その二女総姫にめあわせて、重宗の隠居

料である高清水の領主とした。後見役として巨理重宗は高清水にいた。元和元年（一六一五）又十郎は十六歳で大坂夏ノ陣に初陣して功をたて、十八歳で元服し巨理伯耆守宗根と名のった。香の前はわが子宗根のいる高清水城×におり、寛永十七年（一六四〇）十二月二日歿した。香の前の法名は安楽院浄養心清法円大姉、菩提寺として安楽寺がたてられた。しかし安楽寺は、宝暦七年（一七五七）巨理氏が佐沼に領地替となったとき領主と共に佐沼に移った。しかし建物はそのまま残り、石母田氏が移って来るとその菩提寺となり名を福現寺と改めた。境内に巨理・石母田両家の墓所があり玉垣をめぐらし厳然としていたが、維新後次第に荒廃した。』

注(1) p.170の注(1)参照。

注(2) p. 68の「30 原田家（甲斐）の子孫について」参照。

注(3) 「東藩史稿」巻之33（作並清亮）に

『原田宗輔母茂庭氏

茂庭氏ハ、石見綱元ノ女ナリ、原田甲斐宗資ニ嫁シ、甲斐宗輔ヲ生ム、寛文ノ変、子宗輔ノ罪ニ坐シ、伊達安房基実ノ采邑巨理ニ謫〔たく〕セラル、茂庭氏憤怨シテ曰、我カ家ハ伊達氏累世ノ名臣タリ、吾カ兒何ノ不義ソ、一朝奸人ニ党〔くみ〕シテ、一家忽チ残滅ス、何ノ面目アリテ、天地ノ間ニ立タンヤ、舌ヲ嚙ミ死セントス、老衰齒存セス、因テ食ヲ断ツ日アリ、寛文十一年八月九日、終ニ餓テ死ス、年七十四』とある。

注(4) p. 65の注(3)参照。なお、茂庭氏家系は p. 64の注(1)参照。

注(5) p. 330の注(3)参照。

注(6) p. 269の注(1)参照。

資料 伊達世臣家譜巻之2、4

仙台あちらこちら（佐々 久）

高清水町史（高清水町）

宮城県女性史（中山栄子。「宮城県史」29の内）

仙台人名大辞書（菊田定郷）

松山町史（松山町）

栗原の遍歴（白鳥白陽）